

「ライフライン (lifeline)」という言葉 ——専門用語である外来語の受け入れと広がり方——

仙 波 光 明

はじめに

阪神大震災の直後から「ライフライン」という言葉が目立って使われるようになった。一般的には知られていなかったような言葉が、あらゆるメディアにあふれていたように思う。この語は、震災の20年ほど前から地震の専門家には知られた言葉だったようだ。

「ライフライン (lifeline)」には和製英語の嫌疑もかけられたが、英語圏においても、地震災害に関連して使われるようになった専門用語であったために、一般的には違和感を抱かせる用語であったらしい。

都市防災問題の専門用語としての「ライフライン (lifeline)」は、阪神大震災の報道を通して大量に使用されたことから、一般に理解される言葉として定着したと言えそうである。

この稿では、「ライフライン」がどのようにして日本語にもたらされ、そして広がったかを、不十分ながらも整理してみたい。挿入の片隅でほこりを被っていた品物を引っ張り出すような感がないでもないが、無意味な試みではあるまい。

1. 震災直後にあふれ出た「ライフライン」という言葉

1. 1. 阪神大震災の直後から、「電気、ガス、水道、電話」などを総括的に表現する言葉として、「ライフライン」という言葉があたりかきめ用意されていたかのように、マスメディアにあふれた。「生命線」という語のほか、一部に「生活ライン」という表現もあったが、結局は「ライフライン」に落ち着いたように見える。なお、「生活線」という訳語も用意されていたが、新聞、週刊誌を主な対象とする筆者の用例採集メモの中には見られない。

1. 2. テレビ・ラジオでの使用例は記録をとっていないが、新聞からは以下のような例が簡単に採集できた。「ライフライン」は、震災の翌日から、見出しにも登場している。

(※ 以下、下線はすべて筆者が付したものである。)

① ライフライン全滅 家の中 足の踏み場なし

(1995.1.18 徳島新聞・社会面見出し)

② 交通機関はじめ水道や電気、電話などライフラインもマヒ状態のまま、約五十万世帯が停電した兵庫県内では…… (1995.1.18 徳島新聞1面)

③ 水道、ガスなどのライフラインや交通機関の復旧に力を入れるよう指示した。

(1995.1.19 朝日新聞・総合2面)

1. 3. 「ライフライン」の新聞での現れ方を、毎日新聞大阪版（注1）によって見ておきたい。

17日には朝・夕刊とも「ライフライン」は使われていない。同日に発行された号外の見出しに使われているのは「都市機能」である。

18日になると、次のような記事の中に現れる。建設相の談話中で用いられていることに注目しておきたい。

〈4〉 野坂浩賢建設相は十七日夕、淡路島、神戸市など被災地をヘリコプターから視察し、同夜、大阪市内で記者会見。「ライフラインである国道43号の復旧を最優先とし、仮設住宅や生活道路の復旧のため、十八日にも建設業界トップを集め協力を要請する」と話した。

同日の社説の中では括弧に包む形で「ライフライン」が用いられている。

〈5〉「都市型大災害の名の通り、鉄道、高速道路など交通網はじめ、電気、ガス、電話、水道など生活に深く関係する「ライフライン」がズタズタになった。

また、同18日のコラム「余録」は、「ライフライン」という言葉について説明する内容になっている。

「船が遭難したときは、救助船が近づき、まず細索を遭難船に送り込む。それから救命胴衣をつけた大索をたぐり寄せる。その細索がライフラインだ▲命綱。直訳すれば生命線。1970年ごろから、片仮名のライフラインという用語が使われだした。電気、水道、電話など線や管で結ばれた、生活に不可欠なシステムがライフライン。（以下省略）」

毎日新聞での「ライフライン」の扱い方を見ると、この言葉が、専門用語としては以前から使われていたが、一般的にはまだ認知されていなかったことが分かる。

1. 4. 朝日新聞大阪版と徳島新聞に戻る。「ライフライン」は、記事の中だけでなく、作家や評論家のコメントの中にも現れている。ただし、これらがいったん取材記者を間に挟んだ上でのコメントである以上、本人が確かに自ら使用したという保証はない。また、テレビ・ラジオなどで耳にした言葉をすぐに用いたことが考えられるかもしれない。しかし、柳田氏のコメントからは、彼がこの方面の専門的な知識を持っていて、「ライフライン」を使用したことが推測できる。また、小松氏は、毎日新聞のインタビューでも、この語を用いているから、確かに本人が使用したのであろう。「ライフライン」という語は、知る人ぞ知るというものであったようだ。

〈6〉 被害想定を目玉となったのは、新幹線の脱線・転覆、高速道路の崩壊によるクルマの惨事、ビルの倒壊、ビル火災・広域火災の恐怖、超高層ビルや地下街のパニック、各種ライフラインの切断による生活機能マヒ、等々だった。

(1995.1.18 徳島新聞・文化 柳田邦男 欺かれた現代都市)

- 〈7〉 幸い、電気や水などのライフラインは生きていたから何とか後片付けに入っている。
(1995.1.18 徳島新聞・文化面 関西在住作家 小松左京氏)
- 〈8〉 しかし、電気がつくなどライフラインが生きていた。
(1995.1.23 毎日新聞 小松左京氏に聞く 聞き書き、編集委員 村井英雄)

1. 5. 「ライフライン」は、一般の人たちにも簡単に受け入れられたように見える。新聞の投書欄からも用例を比較的早い段階から拾うことができた。また、朝日新聞（大阪版）の「声」欄からは、1998年から2001年までの間、少なくとも毎年1例を拾うことができ、徳島新聞「読者の手紙」欄からは、1998年、1999年に例を確認できる。「ライフ」「ライン」ともに既になじみのある語であることも、「ライフライン」を受容しやすくしたかもしれない。

なお用例11は、都市防災関連用語としての「ライフライン」とは意味が異なり、「満州は日本の生命線」というような場合の「生命線」の意味に近いような印象を受ける。また、比喩的用法もすぐに現れている（用例12）

- 〈9〉 今後の余震による二次災害対策、遺体不明者の処理、ライフラインの復興その他諸問題が、現地では山積みするほどあるのではなからうか。
(1995.1.27 徳島新聞・読者の手紙 47歳・建設業)
- 〈10〉 ライフラインも止まることなく、テレビをつけてすぐ状況を知ることができましたが、電話はしばらく通じませんでした。
(2001.3.29 朝日新聞・声 主婦・47歳)
- 〈11〉 もし致命的なパニックが起きると、日本のライフラインであるエネルギーを含む物流の混乱と停止が起り得ることは容易に推測できる。
(1999.12.15 徳島新聞・読者の手紙 49歳・会社役員)
- 〈12〉 命があったから、お金の流れという経済のライフラインを守ることができた。
(1995.2.4 朝日新聞・経済 「かお」日銀神戸支店長 遠藤勝裕さん)

1. 6. 「電気、ガス、水道」など都市生活に欠かすことのできない設備を一括して表現する語として、「ライフライン」以外の表現として、「ライフライン」の訳語と考えられる「生命線」（用例13、14）が比較的多く用いられ、「生活ライン」（用例15）という表現も試みられ、投書欄には「生活機能」というものも見られた（用例16）。また、「ユーティリティ・ライン」という語も遅れて現れている（用例17）。以下、筆者の目に触れ、耳に入ってきた用例を挙げておく。

- 〈13〉 都市の生命線 復旧へ急ピッチ〈見出し〉 ……日々の生活を支える水道、電気、ガス、電話などライフライン（生命線）の復旧作業に拍車がかかり、二十三日中には電気が、ほぼ完全に供給できる見通しとなった。（1995.1.23 朝日新聞 社会面）
- 〈14〉 水道、ガス、電気、都市を支える生命線（ライフライン）は震災で大きな被害を受けた。／その影響は、ライン同士をつなぐ「横糸」ともいえる電話の不通で、さらに広がっ

ていった。(1995.2.24 朝日新聞 「爪痕 4 阪神大震災 第3部」

〈15〉 あの、昨日も、ちょっと言いましたけども、やっぱり、あの、今必要なことって言うと、生活ラインに関することですよー。え、そうすると、こういう、音楽とか演芸であるとかは、一番最後になってくると思うんですよ、どうしても。復活する順番から言えば……。

(1995.2.2 毎日放送ラジオ：スミからすみまで愛なのね 角淳一)

この「生活ライン」という表現は、1995年1月23日朝の朝日放送ラジオ「ハイ可朝です」の枠内のニュースでも用いられた。

〈16〉 電気、ガス、水道、電話、すべての生活機能を失って……

(1995.1.20 徳島新聞・読者の手紙 67歳・主婦)

〈17〉 建物や橋や高速道路や電気・ガスなどのユーティリティ・ラインの強化に力を入れたのだ。(1997.9.25 週刊新潮)

1. 7. ところで、「生命線」はなぜ「ライフライン」に敗れたかに見えるのであろうか。「ライフライン」の意味の説明には、必ず「生命線」が用いられているのに。「余録」でもそうだったし(1. 3.)、後述する用語集などでも同様である。

『毎日 interactive』(<http://www.mainichi.co.jp/>)で毎日新聞過去2年間の記事に含まれる「生命線」と「ライフライン」を検索してみると、「生命線」は11件、ラグビーの記事1例をのぞき、あとは政治関係の記事の中で使われている。一方、「ライフライン」は34件あり、Y2K 問題関連5件、その他3件のほかはすべて震災等の防災関連の記事で使われている。

YAHOOで「生命線」を検索してみると、約22,300件該当し、手相の生命線を除いてもなお21,000件が残る。これらの「生命線」の用法は多彩であるが、今はそれを仔細に検討することが目的ではない。

さて、この検索結果の初めから200件を調べてみると、「生命線となる(幹線)道路」「琵琶湖の水、近畿1,400万人の生命線」「企業の生命線となるインターネット運用」「生命線ともいべき電力線・通信線」「河川は地域に住む人々たちにとっての生命線です」のように「ライフライン」と類義の用例が見つかるのだが、「ライフライン」のように「電気・ガス・水道……」を包括的に指し示した例は見つからない。全体の1%を眺めたにすぎないのだから、断定的なことは言えないが、どうやら一つ一つの事柄を指すときには「生命線」が、防災に関連して包括的に言うときには「ライフライン」が使われるという意味分担が生じているのではないだろうか。このことは、次に示す林郁の説明からも窺えよう。

今回の地震に関する報道に目立って使われた言葉に「ライフライン」があります。訳せば生命線。平和な日本で生か死かと言うのは、これまで重い事故や病気の場面でしたが、今回は生活を支える条件である水・電気・ガスを主に指しています。大都市で発生した災害の特徴が、この言葉に込められています。

(1995.2.4 朝日新聞・家庭欄 林郁「くらし考」)

2. 専門用語「ライフライン」

2. 1. 前項で見たように、「ライフライン」という言葉は、専門家にはよく知られていた言葉であったと推測できる。

試みに土木学会編『土木工学ハンドブックⅡ』（技報堂出版 1989年）を見ると、第11編第6章が「ライフライン」に宛てられており、その459頁に次のような記述がある。

ライフラインという言葉は、1971年サンフェルナンド地震後にアメリカの地震工学者の間で盛んに使われた。通常「ライフライン」とは、上下水道施設などの水の供給処理系（システム）、電力・ガス・オイルなどのエネルギーの供給系、道路・鉄道を含む交通網系、電信・電話・専用回線・放送などの情報伝達網系を指す。

また、同書、第64編第7章、「防災対策」ののところ（2623頁）には、

また、県（静岡県＝筆者注）地震対策課を事務局としてライフライン連絡会を1982年に発足させ、早期復旧のための技術的な検討や情報の交換を定期的に行っており、……。と書かれており、この二つの記述から、「ライフライン」が研究者や防災行政担当者の間では、おなじみの言葉になっていたことが推測できる。阪神大震災の直後から、「ライフライン」が頻繁に使用されるようになった背景が理解できるであろう。

2. 2. このような専門用語が、どのように一般に知られるようになったのであろうか。新語の収集に関しては『現代用語の基礎知識』（以下『基礎知識』と略称する）に一日の長があると思われる。そこでまず、『基礎知識』に、いつからどのように「ライフライン」が扱われているかを調べてみた。

この言葉が『基礎知識』に現れるのは1975年版からである（1973年以前については未確認）。巻末の外来語・略語の欄に納められていて、「命網。生命線。生活線。電気、ガス、水道、などをいう。」とある。これは1977年版まで同じである（1978、79年版は未確認）。

以後、1995年版までを点検すると、英語の綴りにも違いがあり（life line, life-line, lifeline）、重要度の認識にも変化が見られる（地震のあとでは重視される）。また、社会福祉分野の「ライフライン」も見え隠れしている。

以下に、少しばかり詳しく見ておく。

2. 3. 都市防災または都市問題用語としての「ライフライン」の扱いは1980年版までは巻末の「外来語・略語」の欄に納められているだけであるが、社会福祉用語「ライフライン」については本文の方でやや詳しい説明が加えられている。

ライフライン（Life Line） 精神的に危機に直面した人が援助を求めてかける電話、いわば心の110番。（以下略）

2. 4. 1981年版を見ると、社会福祉用語の項目、外来語・略語の項目での扱いは前年版と同じであるが、都市問題用語の項目に「ライフライン・システム」が登場し、以下のよう

に説明される。

ライフライン・システム (life line system) 現代都市の神経や血管にあたるガス・水道・電話などの生命線に地震が及ぼす影響とその対策を日米共同で研究しようという計画。ライフラインにはこの他、石油タンク、下水道、道路、橋、鉄道、電気、放送、エネルギー、情報の輸送に関連する検討が含まれる。これらは地震時に被害を受けやすく、住民に大きな被害を与える。昭和53年の宮城県沖地震では被害が生命線を直撃し、水道の復旧に三日、ガスに三ヶ月もかかり、仙台市民に極度の不便と不安を強いた。アメリカでも1971年のサンフェルナンド地震で大被害が発生。ライフラインの耐震復旧に目が向けられるようになった。そこで地震研究先進国の日米科学者の共同研究の案が進んだ。

「ライフライン (life-line)」は、この年の版で、なぜか社会風俗用語の項目として扱われている。全文の引用は控えるが、この語の説明の中に「専門家はこれを「ライフラインの破壊」と呼んだが、これは数年前アメリカの耐震工学のデューク教授が使った言葉(注2)で、……」とあることに注意しておきたい。

2. 5. 1982・1983年版は1981年版に同じである。1984年版になると、「ライフライン・システム」が都市問題用語の最新重要語として扱われている。外来語・略語の欄は1981年に同じ。

1985年版では、「外来語・略語」欄の「ライフライン」の説明に「いのちの電話」が加わっていて、1988年版になると、さらに「緊急相談電話」が加わっている。

ライフライン (life line) 命綱。生命線。生活線。電気、ガス、水道などをいう。「いのちの電話」。緊急相談電話。(1988年版)

1990年版になると「ライフラインシステム」の項目が消え、1991年版からは、「ライフライン・システム」の語そのものが消えているようだ。

1993年版は未確認だが、1994年版・1995年版で「ライフライン」は外来語・略語欄のみの扱いであって、1988年版と同じである。

2. 6. 震災翌年の1996年版になると、阪神大震災の関連で「ライフライン」を扱う項目が増えているが、巻頭特集「都市型震災とその防災を考える」(望月利男監修)、また、「ワードウォッチングの解説」(稲垣吉彦)中の「阪神大震災関連ワード」、「この一年の事件の解説」(赤塚行雄)とともに「風俗・流行」の章で扱われている。「1995年マンガ世相風俗デキゴト学」(畑田国男)の中でも取り上げられ、外来語・略語の欄でも下に示すように、説明が詳しくなっている。この言葉が、いかに関心を呼んだかを示すものであろう。

ライフライン (life line) ①命綱。生命線。②生活線。電気、ガス、水道などをいう。

▲英語では1971年のカリフォルニア州サンフェルナンド地震の後この意味で専門家により使われ始めたが、一般語ではない。③(和製用法で)「いのちの電話」(注3)。緊急

相談電話。

2. 7. 参考までに、類書の『知恵蔵』や『imidas』のそれぞれ1990年版について見ておこう。『知恵蔵』『imidas』ともに、地震・火山用語として取り上げるほか、外来語・略語の欄では「命綱」等の基本的な意味を記し、ついで「電気・ガス・水道」等の都市防災関連の意味を挙げ、「生命線」という訳語をも添えている。

その他、1980年刊の『昭文時事・常識用語事典』昭文社には「ライフライン」が収録されているし、『三省堂国語辞典』には、第4版（1992年）から収録されている。

このように、「ライフライン」は、1970年代半ばから一般向けの辞書類にも取り上げられていた。

なお、蛇足ながら、『imidas』では、情報・通信産業用語の「アクセス・チャージ」の解説の中で「FCCは低所得層に対して「ライフライン」とよぶアクセス・チャージの負担を免除する制度を各州に導入をよびかけている。」と「ライフライン」を使用していることを付記しておく。この「ライフライン」は、社会福祉分野の用語であろう。

3. 「ライフライン」は和製英語か

3. 1. 震災直後に「ライフライン」は和製英語であるかどうかが話題になった。都市防災用語としての「ライフライン」が和製英語でないことは前節に引用した『土木工学ハンドブック』『基礎知識』の記述を信頼すれば事足りるかもしれないが、念のため以下に確認をしておきたい。また、なぜ、和製英語の疑いを持たれたかに興味が残る。その経緯をきちんと追跡できるだけの十分な材料を、筆者は、残念ながら持ち合わせてはいないが、管見の範囲でこのことについても整理しておきたい。

3. 2. この発端はニューヨークタイムスの記事であったようだ。それに対して、『基礎知識』の中で赤塚行雄は次のように述べている。

米紙「ニューヨークタイムス」は英語の誤用例として指摘したが、アメリカの地震工学者の造語で、専門用語として正しい。

（風俗・流行「この一年の事件の解説」1018頁）

また、『中央公論』（1995年7月号）誌上では、大津栄一郎が読売新聞の記事を紹介する形で、以下のように書いている。

ニューヨーク・タイムズの東京特派員が「新たにはやり始めたおかしな和製英語」として紙上に紹介してから、一時話題を集めたが、やがて読売新聞が日米の防災科学の専門家の話として、そういう意味での専門用語としてライフラインという言葉は存在し、現実に使われているということを紹介したせいでもあろう。ただ読売新聞も、在日米人記者には、この言葉にやはり「違和感を感じる」という人が多いということも紹介している。

在日米人記者には「lifeline」を「電気・ガス・水道……など」の意味で使うことに対して違和感を感じる人が多いということであるが、震災後の英文の記事の中にも用例を見いだすことはできる。

英文毎日には、A P 通信の配信と思われる次のような記事があり、京都大学の河田恵昭の談話を紹介する形であるが、lifeline が使われている。

"It paralyzed our lifelines -- crucial items for everyday life, such as railway, gas and telephone services," he said.....(AP)

また、『タイム』誌にも例が見つかった。

Igarashi was trying to explain why the government had seemed to sleepwalk its way toward extending rescue and relief lifelines in the quake's immediate aftermath. (TIME:February 6, 1995)

3. 3. ところで、インターネットを利用して調査してみると、どのようなことが分かるであろうか。アメリカの YAHOO で、lifeline を検索してみるとわずかに69のサイトが見つかるだけであり、一見すると健康問題に関わるサイトが多いような印象を受ける。さらにキーワードに earthquake を加えて検索すると、1つのサイトが残るだけになる。カナダの YAHOO で検索しても同様である。

しかし、AltaVista で検索すると事情は一変する。lifeline をキーワードに指定して英語のサイトを検索すると、19万近いサイトがあることが示される。次に earthquake を加えて検索すると2200余が残る。

この段階で、表示されたリストの初めの方に次のようなサイトが見つかる。

Lifelines and earthquake hazards in the greater Seattle area (注4)

(大シアトル地区におけるライフラインと地震の危険)

そして、Introduction の章には、

The greater Seattle area, like any modern urban area, depends on highways, railroads, pipelines, ports, airports, communications, and the electrical power system to sustain its economic life. When any of these lifeline systems are disrupted, economic losses can occur. (大シアトル地区は、他の近代都市地域と同様に、高速道路、鉄道、パイプライン、港、空港、通信、電力システムに頼ってその経済生活を維持している。これらのライフライン・システムのどれかが破壊されれば、経済的損失が起こりうる。)

とあって、lifeline systems が何を指して使われているかは明らかである。また、後の章では、水、排水、天然ガスや石油などもライフラインに含まれることが示されている。

このサイトは2002年2月に更新されているが、地震災害対策とライフラインを取り上げたウェブサイトは、その他にも数々発見できる。この分野で、米人記者が違和感を感じるとする用法の lifeline がごく普通に用いられているのは明らかであろう。

3. 4. さて、AltaVista で「lifeline + earthquake + engineering」と入力して検索する

と、なお900を超えるサイトが残るのである。これは、AltaVista が世界中のサイトを対象としているためではないかと思われる。詳細な点検はしていないが、この中にはミラーサイトも含まれるのであろう。

さらにいくつかのキーワードを取り替えながら検索した中に、lifeline がどのように定義されてきたかを述べた内容を含むサイトが見つかった。「CHAPTER 7 - CRITICAL FACILITIES MAPPING」(注5)と題された文章の中に、4つの定義が紹介されている。原文は省略して、日本語訳のみを示す。

《1》1977年、Earthquake Engineering Research Institute によるもの。

コミュニティを支えるために不可欠なシステム

《2》1982年、Taylor 他によって示された定義

(1) コミュニティの生存に必要な水・汚水・輸送・通信施設、(2) コミュニティに対して不可欠なサービスを提供するシステム、(3) 日常生活において重要であり、もし中断されると社会や経済に広範囲に渡る不便や損害を与えることになるサービス、(4) 社会が依存している地理的に広がったネットワーク。

《3》1984年、Schiff による定義

近代工業社会のコミュニティーが生き残り栄えるために必要な、人・もの・エネルギー・情報を運ぶのに必要とされる設備。病院・消防・非常事態センターなどの、災害状況下に不可欠な設備やサービスで……他に置き換えることのできないもの。

《4》1987年、Bender による定義

災害後の復旧にあたって優先的な要素と認められるべき、決定的に重要な(生産設備、インフラストラクチャーのネットワーク、settlements 支援システムの)部分(segments)または構成要素(component)。

1980年代において、都市防災問題用語としての lifeline は、このように専門用語としての定義が整理されつつあった段階のようである。

3. 5. ニューヨークタイムズの記者が和製英語という判断をした理由としては、次のようなことが言えるかもしれない。

lifelines あるいは lifeline systems といった言葉は、地震災害関連の用語として専門家には知られており、また、地震災害に関心を持たざるを得ない地域の人々は知っていたかもしれないが、それ以外の人には無縁の言葉であった。また、米国の地球物理学者の地震予知に関するコメントの引用に続いて、「ユーティリティ・ライン」を用いている(1. 6. 用例17)ことに意味を見いだすことができるとすれば、地震防災の専門家周辺の人にも専門用語としての lifeline が「常識」にはなっていなかったかもしれないということであろうか。

おわりに

4. 1. 都市生活基盤としての、電気・ガス・水道・通信施設・交通網等々を指し示す言葉として英語（アメリカの）では、lifeline に新しい意味を託すという方法がとられたのに対し、日本語ではいくつかの言い換えが試みられながらも、結局「ライフライン」をそのまま借用するということに落ち着いたようである。lifelines や lifeline systems の訳語として「生命線」がおそらく有力であり得たと思われるのに、こちらの方は捨てられたようだ。日本語では、「生命線」に託される意味と「ライフライン」が指し示す内容とのあいだに、ある種の線引きをする道を選んだのであろうか。つまり、「生命線」は都市機能に限らず、我々の生活や企業の経営を維持するために必要な何か一つのことを指し、「ライフライン」は都市防災用語として、この項の冒頭に記した内容で用いるという方向である。

また、現代の借用語の中には、英語でも（その他の外国語でも同様かもしれない）一般的には知られず、また定義も未成熟な言葉が日本語の中に持ち込まれ、場合によっては、外国語と日本語のあいだで同時に指示内容の整理が進むものがあるのだと言えまいか。

従来、借用語、特に英語については、英語としての意味と日本語の中での意味の違いがやり玉に挙がり、「正しい意味」で使うべきだという声が聞かれるなど、外国語からの一方的な借用という観点から議論がされてきたように思われる。しかし、外国語との接触が密度を高めてくると、一方でできあがった言葉を他方に好都合な部分だけ取り入れるという見方はすまない例も増えてくるのではあるまいか。特に、専門用語に関しては、そのようなことが言えるだろう。

【用例検索対象】

この稿をなすに当たって、本文中に明示した資料の他、用例の検索にはインターネット、および以下に挙げる電子テキストを対象とした。

『CD-ROM 版 新潮文庫 大正の文豪』『CD-ROM 版 新潮文庫の百冊』新潮社、『短編小説傑作選・戦後50年の作家たち』文藝春秋社 一九九五年七月臨時増刊号、「阿川佐和子のこの人に会いたい」（『週刊文春』連載）75回分、『週刊朝日』連載の対談35回分、朝日新聞・声（1996～2001年）300日分、徳島新聞・読者の手紙（1996～2001年）約550日分、同・ちよつとええ話（1996～2001年）約600日分、その他、筆者の用例採集ノート。

【注】

1. 『阪神大震災 特別縮刷版 毎日新聞（大阪本社発行）は何を伝えたか』1995年3月毎日新聞社。
2. 例えば、次の文献はその1例であろう。Duke, C. M., and Moran, D. F., 1972, Earthquakes and city lifelines, in The San Fernando earthquake of February 9, 1971 and public policy: Special Subcommittee of the Joint Committee on Seismic Safety, California Legislature.（下線は筆者）
3. ここには、和製用法と書かれているが、Lifeline Darling Downs - telephone support

for people contemplating suicide. (<http://www.lifeline.com.au/>) というオーストラリアの組織もある。また、緊急相談電話のシステムを紹介しているサイトも英語圏に見つかる。これも、和製用法とは言えないであろう。

4. <http://geology.wr.usgs.gov/mteature/ife/index.html>

5. ここに引用したのは、1991年にワシントンで “Department of Regional Development and Environment Executive Secretariat for Economic and Social Affairs Organization of American States ” により発行された、『Primer on Natural Hazard Management in Integrated Regional Development Planning (総合地域開発計画における自然災害管理に関する手引き)』の第7章である。